



公益財団法人早期胃癌検診協会

News Letter

第 25 版 : 発行日 平成 27 年 7 月 31 日

低線量肺がんCT検診

がんによる死亡数の第 1 位は「肺がん」です

わが国で 2013 年にがんで死亡した人は、364,872 人（男性 216,975 人、女性 147,897 人）です。そのうち男性で最も多いのは肺がん、次に胃がん、大腸がんと続きます。一方、女性で最も多いのは大腸がん、次に肺がん、胃がんという順になります。男女を合わせた死亡数の 1 位は肺がんです。

	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
男 性	肺	胃	大腸	肝臓	膵臓
女 性	大腸	肺	胃	膵臓	乳房
男女計	肺	胃	大腸	膵臓	肝臓

(国立研究開発法人国立がん研究センターがん対策情報センター統計)

肺がんと喫煙

肺がんの原因は、喫煙にあるといわれています。タバコを吸わない人のリスクを 1 とした場合、タバコを吸う人のリスクは、がん全体で男性は 2 倍、女性は 1.6 倍です。肺がんでは男性は 4.8 倍、女性は 3.9 倍になります。

がん種別	相対リスク	
	男	女
全 がん	2.0	1.6
食 道	3.4	1.9
胃	1.5	1.2
肝・胆管	1.8	1.7
喉 頭	5.5	-
肺	4.8	3.9

肺がんを早期発見するための検査

従来の胸部X線検査による検診で発見される肺がんの大きさは、一般的に腫瘍径が20～30mm以上とされており、発見時には転移の可能性が高く、病期はⅡ又はⅢで5年生存率は約20%と低くなっています。つまり胸部X線検査による肺がん検診は、治せる段階で肺がんを発見するには感度不足といえます。

これに対しCTを使用した検診では、腫瘍径が15～20mm前後で70～90%が病期Ⅰ（5年生存率70%）であると報告されています。したがって、肺がんを早期に発見するにはCT検診が有効です。

肺がんの5年生存率と病期

治療開始からの5年間生存する割合（手術をした場合の5年生存率）は、早い段階で見つかる70%と高い生存率を示します。

しかし、発見が遅いと50%、20%と次第に生存率は低くなります。早い段階での発見が鍵となります。

病期（進行度）	生存率
Ⅰ期（大きさが3cm前後で転移なし）	70%
Ⅱ期（大きさが3cm前後で肺門リンパ節に転移あり）	50%
Ⅲ期（大きさが3cm以上で肺門リンパ節、食道、心臓のリンパ節への転移あり）	20%

低線量肺がんCT検診

肺がんの早期発見に有効なCT検査ですが、従来のCT検査ではX線の被曝が多いことが問題でした。しかし現在では、従来の1/4～1/3程度のX線量で検査することが可能となり、胃バリウム検査よりも少ない被曝量で検査することができます。

低線量肺がんCT検診をお勧めする方

- ・ 喫煙者
- ・ 50歳以上
- ・ 肺がんが心配な方
- ・ 周りに喫煙者が多い方

○自覚症状（血痰や頑固な咳など）がある方は、検査法について外来でご相談ください。



CT検査の予約やご相談は、Tel.03-3668-6800 へご連絡ください。



今後もニュースレターを発行し、皆様の健康管理に少しでも参考になればと思います。ぜひ皆様からのご意見、ご感想をお寄せください。今後もこのニュースレターやホームページ等を通じ、役立つ情報を発信してまいります。今後ともよろしくお願いいたします。

公益財団法人早期胃癌検診協会 事務局
Tel.03-3668-6803 / E-mail:mail@soiken.or.jp